

下山大工

下山大工とは甲斐国巨摩郡下山村（現 山梨県南巨摩郡身延町下山）を拠点とした宮大工の集団です。その発祥は鎌倉時代に遡り、承久元年(1219)、笛吹市境川の石橋八幡宮本殿再建の棟札(※1)に下山大工の七郎二の名が記録されるほか、正応元年(1288)、日蓮聖人の高弟 日興上人が波木井実長と対立し、身延山を去って富士郡(現在の静岡県富士市・富士宮市の区域)へ赴く際、下山の石川3家が随行し、十二間四面、その内部が六区画となる「六壺(坪)の間」を造立したと伝わります。

『甲斐国志』によれば鎌倉時代初期、下山には甲斐源氏(※2)加賀美遠光の孫、下山小太郎光重が居館を構えており、下山氏の家臣の住居を含め、その建築のため当地に大工集団が誕生したのではないかという説があります。

※1…建物の建築・修築を記念して棟木や梁に取りつけた札 ※2…平安時代末期に甲斐国に土着した源氏の一族



■春日権現験記絵 写(部分)

国立国会図書館デジタルコレクションより

この絵は鎌倉時代に描かれた原画をもとに江戸時代に写されたもので、中世の建築技法を知る事ができる貴重な資料です。絵の中には大工仕事の様々な場面が描かれています。

下記の①～⑩の場面をそれぞれ探してみましょう。

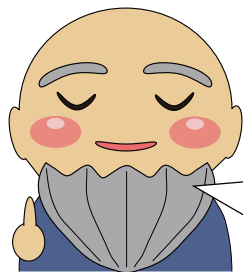
- ①細長い箱に水を張って水平を確かめている
- ②柱を建てる礎石を突き固めている
- ③尺杖を持ち指図をしている棟梁
- ④墨壺を使って角材に線をつけている
- ⑤角材を割るためにノミを入れている
- ⑥円柱にヤリガンナをかけて滑らかにしている
- ⑦板材にチョウナをかけて平滑にしている
- ⑧工具箱近くで遊ぶ大工見習いの小僧
- ⑨ご飯を食べる大工たち
- ⑩木屑を運ぶ小僧たち

※道具の名前や使い方は⑥ページをご覧ください。

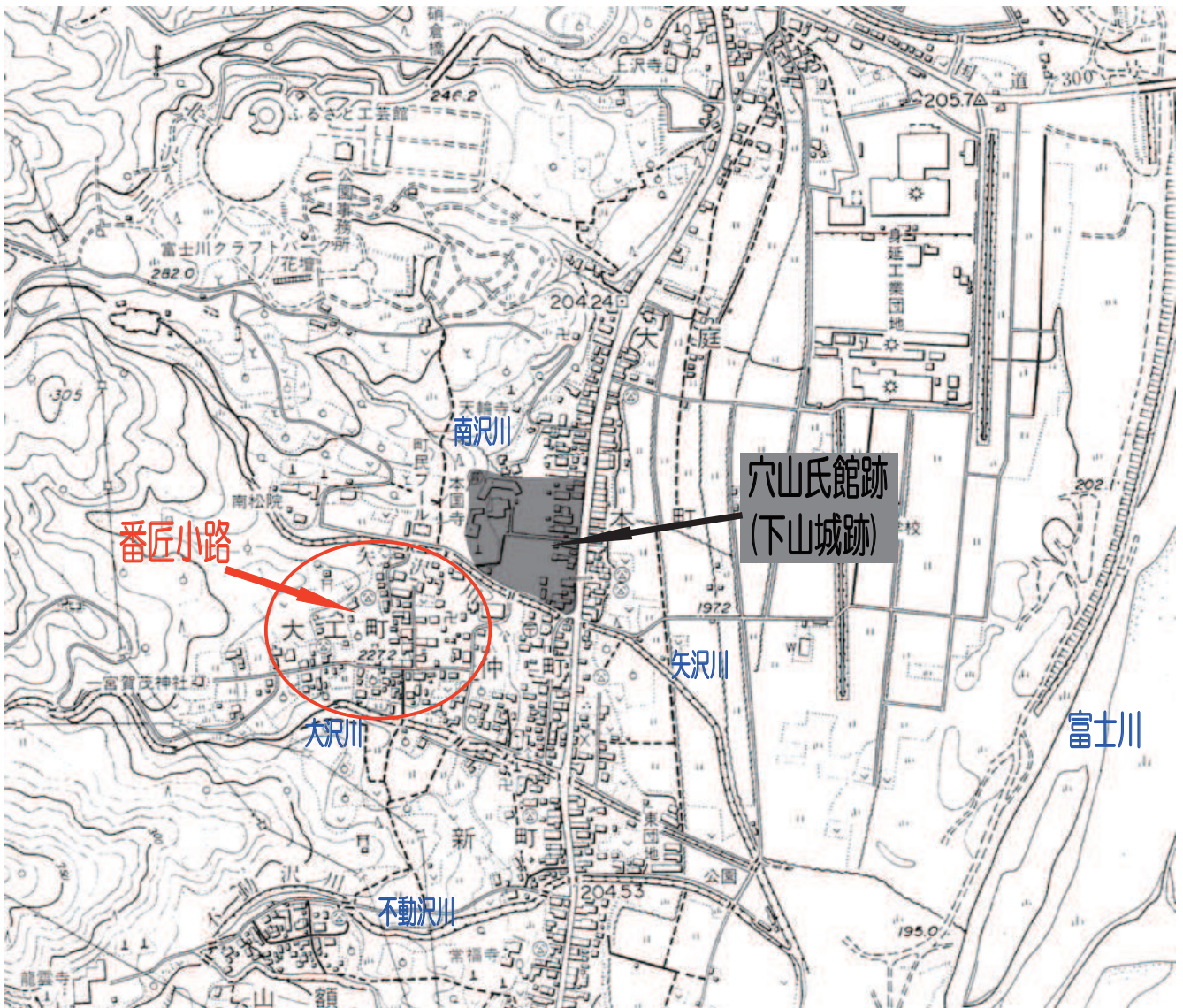
○ 穴山氏と下山大工

下山には番匠小路という地名が残っており、今でもこの地域は大工町と呼ばれています。これは戦国時代に領主であった穴山氏が当地に大工を集住させた歴史を伝えるものです。穴山信友・信君（梅雪）の親子は領内に20以上の寺社を造立したので、多くの職人、取り分け大工を大切にしました。梅雪は下山大工の竹下家、石河（川）家に領内の大工をまとめる役割を与えました。この二つの家系は「役引大工」といって諸役（いろいろな役・税金）が免除されるとともに、大工たちを監督し、命令に背く者からは道具を取り上げて仕事をさせないなどの権限がありました。

穴山氏についてはミニブック⑤「穴山梅雪の生涯と文化財」をご参照ください。



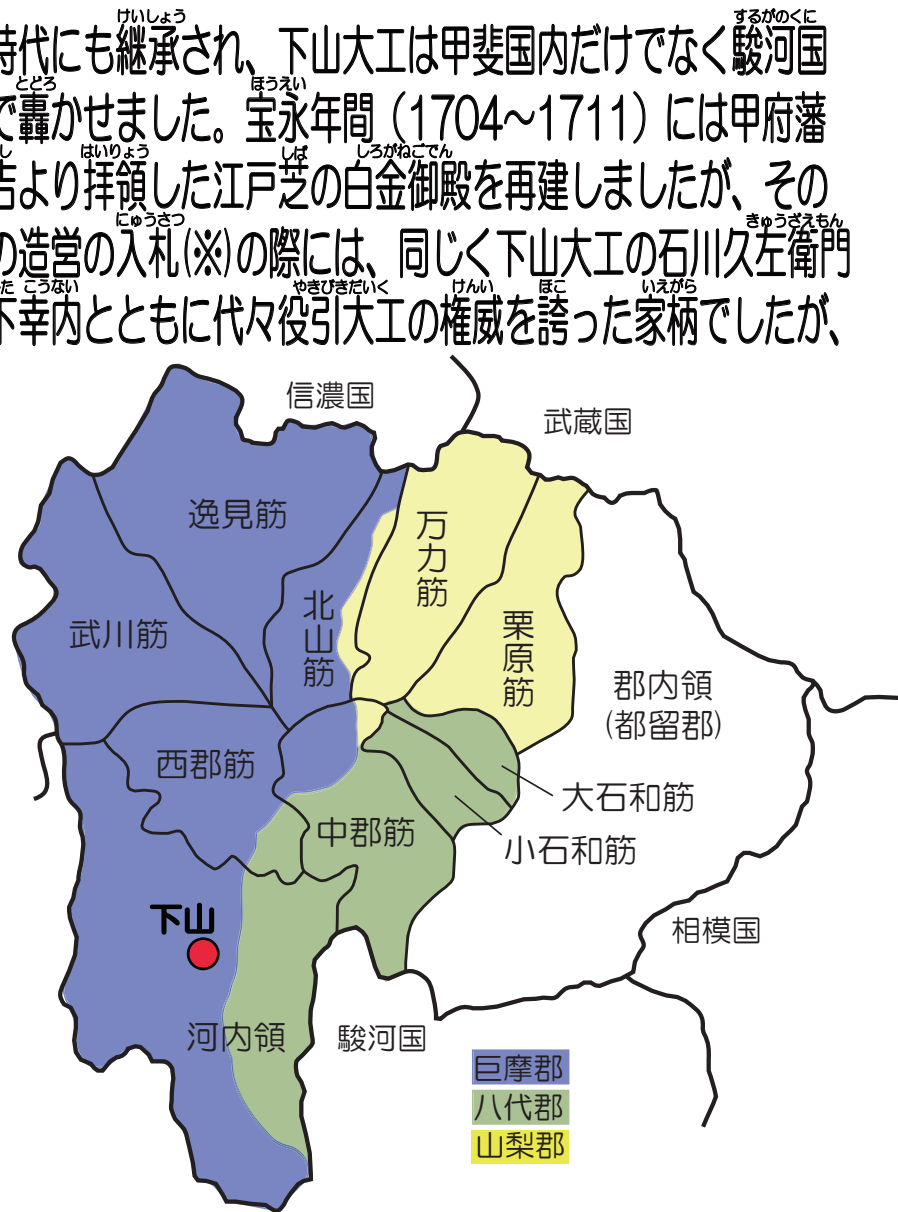
番匠は中世の日本で木造建築に関わった職人のことで、今の大工の前身にあたるんじや。ちなみにもともと大工は木造建築に限らず様々な職人の長に与えられた役職として始まったんじやよ。



○江戸時代の下山大工①

竹下家と石川家に与えられた特権は江戸時代にも継承され、下山大工は甲斐国内だけでなく駿河国の寺社建築でも活躍し、その名を江戸にまで轟かせました。宝永年間（1704～1711）には甲府藩主徳川綱豊（後の六代将軍家宣）が将軍綱吉より拝領した江戸芝の白金御殿を再建しましたが、その造営に関わったのが石川五左衛門です。この造営の入札（※）の際には、同じく下山大工の石川久左衛門との競合がありました。石川久左衛門は竹下幸内とともに代々役引大工の権威を誇った家柄でしたが、当時それに反対する勢力は五左衛門を味方にして対立し、久左衛門・幸内派と五左衛門派による三郡（甲斐国のうち都留郡を除く、巨摩・八代・山梨の三郡）の大工棟梁職をめぐる争いに発展しました。このほか、江戸時代の後半には甲府の町方大工と稼ぎ場をめぐる争いもありました。

※公共工事等の請負人を決める制度。大工などの職人集団が参加し、最も良い条件を提示した者が請負人に選ばれた。



江戸時代、下山大工の人数は群を抜き、全盛期の文化・文政期（1804～1830）には下山の成人男子の半数以上が大工だったそうじゃ。



○太子講(たいしこう)

「太子講」は聖徳太子を尊崇する人々によって組織され、全国各地で行われてきました。特に大工等の建築関係者の間で盛んに行われたのは、聖徳太子が法隆寺などを建立し、日本最古の木造建築の礎を築いたためといわれています。

下山大工も「太子講」を組織して正月とお盆などに集会を行い、大工としての心構えや規律を決めていました。



太子講本尊画像（画像提供：上平聖道氏）※この画像を描いた松木輝殷も下山大工の一人です。詳しくは⑤ページをご覧ください。

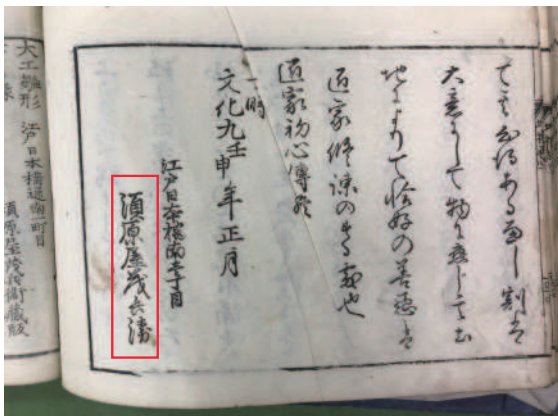
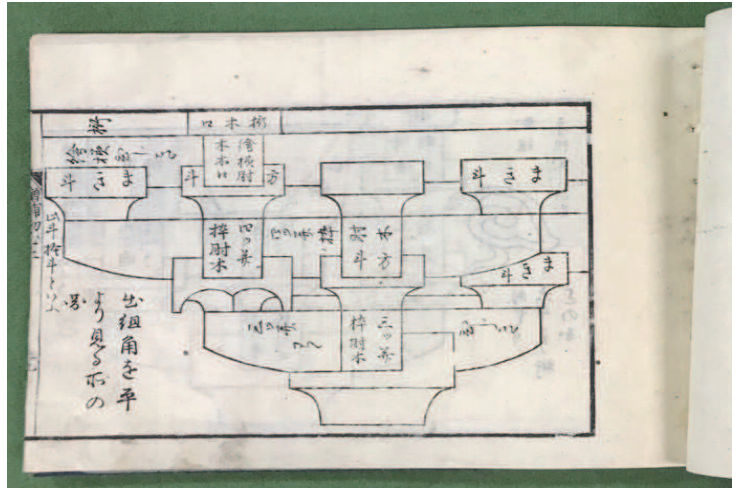
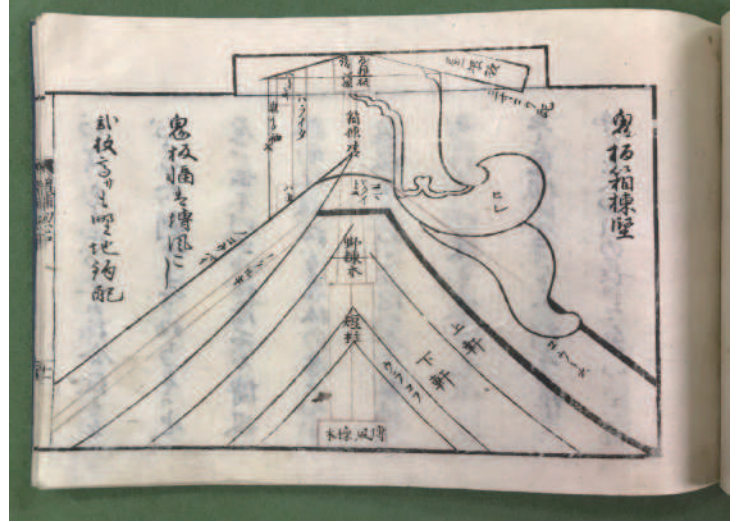
江戸時代の下山大工②

町指定文化財 しょうけひながたぞうほしよんでん 匠家雛形増補初心伝六冊

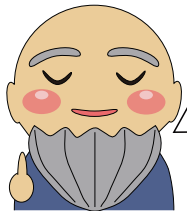


しちろうざえもん

下山大工石川七郎左衛門の著で、江戸時代の終わり頃から近代に至るまで寺社建築に従事する大工の必読本として全国的に有名な書物です。文化9年(1812)の発行以来何回か出版され、上中下3巻2冊宛で、寺社建築の標準を系統づけています。



初心伝の出版には当時出版業界の最大手の地位を築いた須原屋茂兵衛すはらや もへいが関わっている。『武鑑』や『江戸切絵図』などの公的な書物を多く手がけておったから、郭物くわくものを手がけた篇屋重三郎つたやじゅうさぶろう(2025年度NHK大河ドラマの主演じゃ)との対比で、「吉原は重三 茂兵衛は丸の内」といわれたんじゃ。



石川七郎左衛門いしかわ しちろうざえもんは宮大工の棟梁として、また彫刻家としてもすぐれた工匠こうしやうとして名を馳せました。身延町内では西嶋の青原院や若宮八幡神社、身延山の鬼子母神堂などに七郎左衛門の彫刻が残っています。



町指定文化財

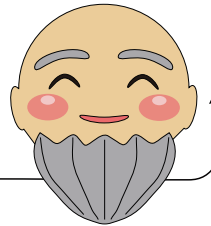
若宮八幡神社本殿

天保2年(1831)、村棟梁の笠井定八郎と七郎左衛門が再建。竜や鳳凰など彫刻が多く施され、幕末期の傾向を示す好例です。彫刻はすべて石川七郎左衛門の作。この神社は県指定無形民俗文化財の「西島の神楽」を伝承する西島神楽団の本拠地です。

○ 明治時代の下山大工 擬洋風建築(ぎようふうけんちく)

擬洋風建築とは、幕末から明治時代初期の日本で主に近世以来の技術を身につけた大工棟梁によって設計施工された建築です。日本の伝統建築に西洋建築の特徴的なデザインを混合し、庶民に文明開化の息吹を伝えようと各地に建設されました。明治時代初期に山梨県令（現在の知事）として赴任した藤村紫朗（1845-1909）も洋風の学校建築を奨励し、藤村式建築と呼ばれた各地の校舎は山梨の近代化の象徴でもありました。

明治時代に政府が出した神仏分離令（※）の影響で下山大工の得意とした寺社建築も下火になっておった。そんな時代の下山大工の松木輝般は擬洋風建築を探究し、13棟の校舎を建築したんじゃよ。甲府駅北口に移築された重要文化財旧睦沢学校（藤村記念館）は輝般の建てた校舎で唯一現存するものじゃよ。ちなみに富士川町の増穂小学校の敷地内にある、県指定文化財旧春米学校は輝般の兄弟弟子、松木高造が設計にたずさわっておるんじゃ。



※神道を国の中心にしようと、神社とお寺を明確に分けようとした命令。

これが「仏教を無くせ」という極端な考えにつながり、一部の人々がお寺を壊したり、仏像を捨てるなどの行動をとりました。

旧春米学校



旧睦沢学校(藤村記念館)



旧春米学校は現在歴史民俗資料館として公開されており、明治～昭和期の学校関連資料や町にゆかりのある第55代内閣総理大臣 石橋湛山(1884～1973)の略歴等をまとめたパネルが展示されています。最上階の六角形の太鼓堂の中にも入ることができ、当時は太鼓を叩いて授業の始まりと終わりを伝えていたことがわかります。



↑ 再現された当時の教室
← 太鼓堂の内部

○ 大工の道具



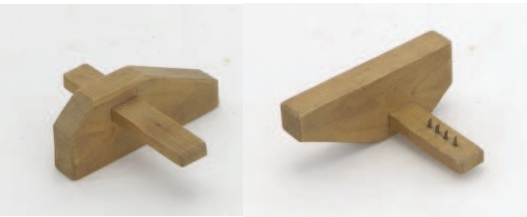
道具箱：大工道具を収納する箱。
高さ25cm×長88cm×幅25cm。



墨壺(スミツボ)：糸車に巻き取られている糸をぴんと張って、墨汁の染みた糸の先についたピンを材木に刺す。この状態で糸をはじくと、直線を引くことができる。



墨さし：材木に線を引いたり文字を書いたりするのに用いるへら状の竹筆。



罫引(ケビキ)：ある辺を基準にして、そこに対して平行な線を引くための道具。写真の罫引は4本の刃が等間隔に付いている。



外丸鉋(ソトマルカンナ)：台の下端が外側に湾曲した鉋、凹型の曲面を削るのに使用する。



横引鋸(ヨコビキノコ)：横引きの刃は「小刀」のように繊維を切断していくので、木目と垂直の方向や斜めの方向に切るときに使用する。



砥石(台付き)：鑿や鉋の刃を研ぐ道具。

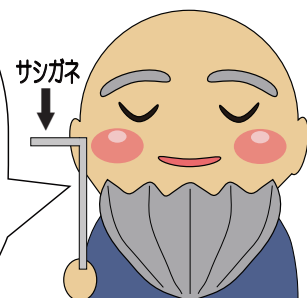


釘抜き：ヤットコ(※)形状の釘抜き。閻魔大王が嘘つきの舌を抜く道具ともされ、エンマとも呼ばれる。
※鍛冶屋が焼けた鉄を挟むのに使った「焼床鋏」に由来。



手斧(チョウナ)：直角に曲がった大きな平鑿に木製の柄をつけた鋤形の斧。木材を平らにするのに用いる。写真の手斧は刃の脇が欠けている。

上にあげた写真の他にもサシガネといって、材木の長さや直角を測ったり、勾配を出す道具もあって、墨壺、チョウナと合わせて「大工の三種の神器」と呼ばれとるよ。①ページの絵にはこの三つの道具を持った大工が描かれておるぞ。それぞれ何人いるか数えてみよう。



○ 町指定無形民俗文化財 下山甚句・盆踊り

甚句とは江戸時代後半に歌われた民謡の一種です。主に七・七・七・五の四句の詩型で、節は地方によって異なります。下山甚句は七・五・五・七・四の五句二十八音の長詩型、130句以上あります。歌い手と踊り手が一緒の素朴な盆踊りで、素歌と素踊りが基本です。身延山の宗教歌が元唄とされていますが、その起源は定かではありません。下山大工によって江戸へ運ばれ、「コチャエ節」となり、その替え唄が民謡「お江戸日本橋」となって幕末から明治にかけて流行しました。戦後「甲州盆唄」としてレコード化された唄がありますが、曲調は下山甚句そのもので、全く同じ歌詞もあります。



♪身延のものは声がよいよい筈だソレ
 南天山の水飲む ドッコイ 南天山の水飲む
 ♪富士川下り身延山 ご祈願がソレ
 すんだら下部湯の宿 ドッコイ すんだら下部湯の宿
 ♪見上げてみれば烏森 見下ろせばソレ
 早川渡舟 綱越しドッコイ 早川渡舟 綱越し

YouTubeで「下山甚句」と検索すると、動画も見られるんじゃ。
 踊りも簡単に覚えられるからみんなで歌って踊ってみたいのう。



下山甚句

♩ = 70

ア-ア みの - ぶの - - も の は - こ え が よ い

よ い は ず だ ソレ な ん て ん や ま の

み ず の む - ドッコイ な ん て ん や ま の - -

み ず - - - - の - む -

採譜：山田勇 提供：下山甚句保存会

○ 下山甚句に歌われた大工

下山甚句には下山の出来事や風土に関するものや宗教（身延山）に関するもの、色恋や嫁姑の関係といった人の感情に関するものなどがあり、下山大工も次のように歌われています。

♪下山大工 政五郎 善光寺の ソレ
 大金堂は撞木棟 ドッコイ 大金堂は撞木棟
 ♪下山番匠 政五郎 お御岳の ソレ
 お神楽殿は八棟 ドッコイ お神楽殿は八棟
 ♪良くでた 御岳神楽殿 下山の ソレ
 番匠さんと江戸の車力(※)で ドッコイ 番匠さんと江戸の車力で
 ♪雷さんは 天で鳴る 荒町の ソレ ※…荷車などをひき、運送を生業とする人
 運四郎さんは地で鳴る ドッコイ 運四郎さんは地で鳴る



甲斐善光寺大金堂



石川政五郎肖像画
 (画像提供：石川重人氏)

政五郎は『匠家雛形増補初心伝』の著者石川七郎左衛門の父で、甲斐善光寺の大金堂を再建した棟梁じゃよ。運四郎は松木輝殷の父で、七郎左衛門の弟子じゃ。下山大工の歴史の一端が甚句を介して伝承されたのがわかるのう。

○ 町指定天然記念物 下山大工町のブドウ



下山大工町の畑地に植えられたブドウ（品種はデラウェア※）で、樹高は1.8メートル、地上1メートルの幹囲は0.85mを図ります。約70年前に当時大工をしていた所有者の父が勝沼からの苗木を移植し、大工仕事の合間にブドウ園を始めました。園の最盛期は1960年代で、4kgの出荷箱で200箱分程の収穫があったそうです。1995年頃に閉園し、ほとんどのブドウが柿や銀杏等に植え替えられたため、現在残っているのは本樹のみです。ブドウは樹齢20～25年経過すると生産力が落ちるため伐採されてしまうことが多く、ブドウの古木が残っているのは大変珍しいことです。県内では、甲州市勝沼町の甲州ブドウ（樹齢130年以上）が市の天然記念物に指定されています。※…小粒で甘みが強い品種で、日本では主に生食用やジュース、ワインの原料として栽培されている。